

## 唯仏一道きよくます

大法は尊嚴である。清淨である。

過去一河の流れに咲きたもう聖者のみ教えは、一言一句たりとも、これを無視してはならない。

必ず合掌して頂戴すべきである。たとえ勝手がよかろうと悪かろうと。

清淨なる如来聖人の御眼をかすめずば、この世に許されざる大悪を平気で行ずることとは出来ないであろう。如来聖人の清き教えなくば、内なる悪に覚めることは不可能であろう。

大法、信ずべし。教え、頂戴すべし。しかして利益求むべからず。

大信、行ずべし。教えはこれを生かすべし。報いられるも、報いられざるも、唯、雨にも堪え、風にも忍び、黙々として、心不断の聞光力によって往生の一道にあれ。善因善果、悪因悪果は、宇宙の鉄則である。

されど、それなるが故に、小善小功德にも、手近にその善果を求め、与えられずば、行きづまって、心内「損じゃ、損じゃ」の声に苦しめられる者、これ即ち「罪福信ずる行者」として、聖人の誠たもうものである。罪福信ずる心即ち汚れたる貪欲心である。

罪福信ずる行者は、因果を信ずるに似て、未だ因果を信ぜず、特に「仏智を疑惑する」者である。

己が小善をたのんで善となし、如来の本願を信ぜず、三宝に離れたるものである。彼は念仏すとも解慢の牢獄に入る。

真実本願を信ずる者は、禍福を越えて、唯、如来世尊の仰せに信順して身の至幸を喜んで生きる。

この人にしてはじめて安心の出来る人となる。彼は決して、一道を歩んで、横道にそれぬが故である。

我はかつて若人に「真面目なる求道者たれ」と求めて、「上手なる説教師になれ」と求めず。

内心には名利を求め、身には悪を行じて慚愧なく、しかして口にはただ滔々たる能弁に、人を泣かし人を笑わす説教師となれる者、再び救い難かるべし。

非道、邪道、無道をそのまゝ見のがしにされるをもつて慈悲とし、親切とすべからず。

我が欠点短所を知らしめらるるをもつて親切とすべし。

如来大悲は悪人を救いたもう。どうかして悪人となるまいとして策を弄し、もがき苦しむ者に、何で清淨なる大慈悲がわかろうか。

人は道を歩み、汽車は軌道を走る。出るに道あり、入るに道あり、来るに道あり、去るに道あり。

仏は一如に乗じて来り、一如に乗じて去る。故に仏を如来と云い如去と云う。

「十方三世の無量慧 おなじく一如に乗じてぞ

二智円満道平等 摂化随縁不思議なり。」

一如とは弥陀の法身に外ならず、故に一如に乗ずとは弥陀に乗ずることである。諸仏は弥陀法身に乘じて、根本智（真智）、後得智（俗智）、二智円満に、道平等に、一切衆生を随縁摂化せられるのである。我等衆生は、本願力に乗托して虚偽顛倒の生死海を度し、諸仏と同じく、涅槃を証して還相摂化の大悲に生きるのである。

「無始流転の苦をすて、無上涅槃を期すること

如来二種の廻向の 恩徳まことに謝しがたし。」

入るも本願力なり、出づるも本願力なり。動静出没、ただ恩徳にあらざるなし。本願力によつて菩提涅槃を得ること、これを他力という。これをおいて他の何れのところにか他力があるう。雑毒虚仮、どろ／＼の煩惱にまかせて、これを他力と言う。誤れるもまた甚だしいかな。

「九十五種世をけがす 唯仏一道きよくます

菩提に出道してのみぞ 火宅の利益は自然なる。」

九十五種の外道、世をけがす。唯、仏道のみ清くまします。見よ世を挙げて外道の為に汚され、迷わされているに、唯仏一道のみ、弥陀本願の大道のみは、清浄にして汚されず。

「菩提に出道してのみぞ 火宅の利益は自然なる。」

この意を善導の法事讚に曰く

「唯仏の一道のみ独り清閑なり。菩提に出道して心尽くることなし。火宅に還来つて人天を度せん。」と。

菩提に出道するとは、迷いを出でて仏果菩提に到ることである。

「三界は安きことなし、猶し火宅の如し。」（法華経譬喩品）

火宅無常の世界に、無常の身を持ち、妄念妄想の心をもって、何をかせんとする。仏果菩提に到達してのみ、火宅に於ける衆生利益は願力によつて自然である。

「五濁の時機いたりては 道俗ともにあらそひて

念仏信ずるひとをみて 疑謗破滅さかりなり。」

悲しくもこのみ言はまことにてまします。念仏を信ずる人は必ず世の疑謗の的となる。手をかえ品をかえて「道」（僧侶）「俗」（俗人）共に、疑謗し破滅せんとする。されど法界の悠久を憶え。電光朝露の命を憶え。何のために、一旦の生を今生に享けたるか。

噫、久遠の真実。

「ただ仏の一道のみ清閑なり。」

何ものにもかえ難きこの道。

仰ぎ願くば我をして唯仏一道の清浄真実を歩ましめたまえ。